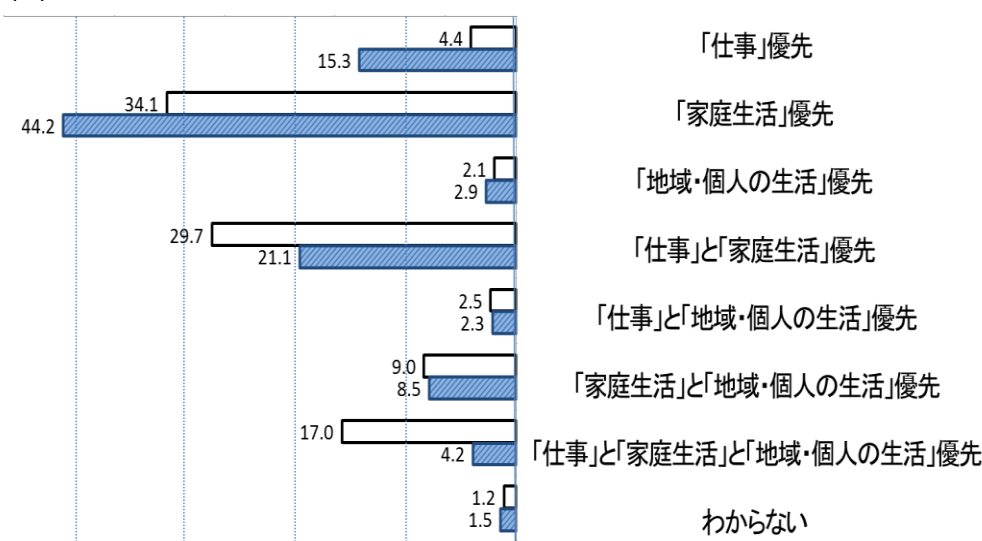
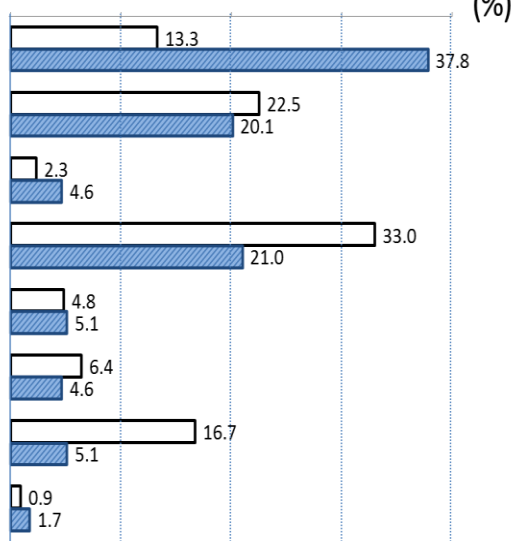


●仕事と生活の調和に関する希望と現実(男女別)●

女性(上:希望 □、下:現実 ■)



男性(上:希望 □、下:現実 ■)



出典:内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成21年10月)より

(全国20歳以上の人対象のうち、「生活の中での「仕事」、「家庭生活」、「地域・個人の生活」(地域活動・学習・趣味・付き合い等)の優先度についてお伺いします。まず、あなたの希望に最も近いものをこの中から1つだけお答えください。)に対する回答。)

☆複数の活動をバランスよく行いたいと希望する人の割合が男女ともに高いが、現実には、女性は「家庭生活」、男性は「仕事」という単一の活動を優先している人の割合が高くなっている。



豊中市在住在勤の保育士:大和(やまと)さん

お互いの生き方を認め合う、柔軟な社会へGO!

保育士(40歳代)、小学6年生と5歳の二児の父。

育児休業は一人目の時に6カ月、二人目の時には2年の期間で取得した。大和さんは「2回の育休の5年の間に、同じ子育て中の父親たちの意識や行動の変化を感じました」と話す。ベビーカーを一人で押すイクメンが増え、保育現場で出会う父親たちには、もっと子どもと関わりたいという想いが見え隠れする。

しかし現実には、長時間労働・仕事優先にならざるを得ず、なかなか希望通りにはいかない。大和さん自身も最初は育休を取るべきかどうか悩んだが、ちょっとした勇気と、宣言することで周囲の理解も得られたし、夫婦互いに時期をずらして取得したので、妻の就業継続の大きな力となった。

育休中は、確かに収入的には厳しいけれど、それに代えがたいものがあった。子育てというかけがえのない貴重な経験を通して、実は、たくさんの“プラス”を仕事にも生活にも還元できた。また、多様な働き方や生き方、みんな違う価値観、それらを認め合うということを実感できた。

これからは、決して育児や介護だけでない“それぞれのワーク・ライフ・バランス”を実現できる社会の仕組みが必要だと大和さんは力説する。「経済不況の今だからこそ、主体的な生き方を阻害する要因を洗い出し、一丸となって持続可能な社会への軌道修正ができる時なのかもしれません」と。